



80歳とは思えないほど颯爽として粋な三戸さん

日本古来の「美」を蘇らせる 心身肌不二の古法美容

古法美容家 三戸唯裕さん



■三戸唯裕著／「手のひら美顔健康法」手のひらからの気で肌のトラブルを解消。考え方や方法を記載。(1991年、「主婦の友健康ボックス」)

糖から始まった 美への探求

「あんな女性には、あとにもさきにも出会ったことがない。きめ細やかで抜けるような白い肌。そして美しい所作、上品な物腰、言葉遣い。外見だけでなく、内面も兼ね備えた美しい人」
その女性が幼いころから使っていたというのが、秘伝の葉草糠袋だった。古法美容家・三戸唯裕さん

ん(80歳)が、美容料について話を聞きに行った京都のある民家でのこと。糠と葉草をブレンドした古式美容料との出会い。三戸さんのその後半世紀に及ぶ「美しいひとづくり」への第一歩だった。
三戸さんは言う。「漢方は千年以上前に処方されたものだが、確かな効果があるからこそ現代へと受け継がれてきた。同様に、古来の知恵が凝縮された美容法は、さまざまな環境変化にさらされる

現代人にも高い効果がある」
格子戸のある玄関、掃き清められた中庭、茶室のように静謐な部屋、調度品の静かなたたずまい。質素にして豊かな暮らし方が垣間見える。和服姿の三戸さんの前に、知らず背筋が伸びる。

千年前の漢方医学書に 注目

「ふくよかできめ細かな」「豊麗な」「濃艶な」「清潔な」……。色白の形容もさまざまに、美人になる術や薬を処方。そんなハウツー本が、およそ千年前、平安時代の日本で編纂されていた。驚くべきその書物は、日本最古の漢方医学全書「医心方」。中国医学をもとに、医学から美容法まで網羅する。

「平安王朝の美意識は素晴らしいものがあつたと想像できる。単

に「美白」と十把ひとからげの現代感覚とは大違い」と苦笑する。
三戸さんは、医心方はもとより、大沢勝、川島四郎、野口三千三など食や身体哲学の研究をも総合した独自の美容即健康法の探求を続けている。

■大沢勝著／
『長生きの科学』
三戸さんが探求の過程
で影響を受けた一冊(東
洋経済新報社刊)

